

1842年のケルン大聖堂建設祭におけるカトリック勢力とプロイセン国王

棚橋 信明

Die Katholiken und König Friedrich Wilhelm IV von Preußen im Kölner Dombaufest von 1842

Nobuaki TANAHASHI

はじめに

1842年9月4日の定礎式をもって、ケルン大聖堂の建設がおよそ280年ぶりに再開されることになった。このとき大聖堂で完成していたのは祭壇のある内陣のみであり、大半は未完成の状態にあった。内陣から西の袖廊と長堂、そして西ファサードに聳え立つはずの2本の尖塔も建設途中にあり、高さ58メートル(4階)まで建設の進んだ南塔には1560年に工事が停止するまで使われていた木製のクレーンが残されたままになっていた¹⁾。1842年の建設再開後、157メートルの高さに達する南北の尖塔が最後に完成し、竣工式が行われたのは1880年10月のことである。

1842年の定礎式の日には、ケルンの市民層により設立された大聖堂建設中央協会(Central-Dombau-Verein)が主催する大規模な大聖堂建設祭が開催された²⁾。大聖堂南の広場で行われた定礎式がこの祭典のクライマックスであり、これには主賓であるプロイセン国王が妻の王妃エリザベートをともなって姿を見せたほか、オーストリアのヨハン大公、ナッサウ公、バイエルンのカール王子、ヴェルテンベルクのアウグスト王子など全部で33人のドイツ諸侯が参列した。定礎式の会場には数千人もの見物人が詰めかけ、会場から溢れた人びとは広場に面した家々の屋根を埋め尽くした。当時のケルンの人口は8万人程度であったが、この祭典を見るために外からケルンを訪れた人の数は3万人とも4万人ともいわれる³⁾。

定礎式に多くのドイツ諸侯が招かれたのは、ケルン大聖堂が「国民記念碑」に位置づけられたことに関係していた。そもそも中世ゴシック様式のカトリック大聖堂が、どのようにして「国民記念碑」に「昇格」することになったのであろうか。

まず、ゲーテの著作『ドイツ建築について』(1772年刊)⁴⁾に鼓舞されたドイツのゴシック復興運動があった。この運動のなかでゴシック様式のドイツ起源が信じられるようになり、この様式をドイツ人の気質に合った優れた建築様式として称賛する声が広がっていった。そして、この運動に対ナポレオン戦争を通じて沸き立ったナショナリズムがさらに勢いを与えた。ライプツィヒでの勝利ののち、ドイツ解放を記念する「国民記念碑教会」をゴシック様式で建設する構想が幾つか持ち上がることになる。そこで250年も前に建設が中断されていたケルン大聖堂も、その候補の一つにされたのである⁵⁾。このときケルン大聖堂の完成を強力に訴えたのが、愛国的ジャーナリストのヨーゼフ・ゲレス(Joseph Görres)であった。1814年11月20日の『ライニッシャー・メルクール(Rheinischer Merkur)』紙において彼は、「未完成のまま廃墟のような状態で見捨てられた」大聖堂を、宗教改革以降に分裂し、混乱を来したドイツの姿に重ね合わせた。そのうえで、この大聖堂を「我々が建設しようとしている新しい帝国のシンボル」として、「その完成に向けてドイツの諸勢力が力を結集する」ことを求めたのである⁶⁾。

そして、実際に1842年9月4日の大聖堂建設祭は、ドイツの諸勢力の結集を内外に示す「国民的祭典」として企画され、大きな成功を収めた。9月6日に発行の大聖堂建設中央協会の機関紙『ケルン大聖堂新聞』は、この祭典においてドイツの諸勢力の代表が「幸福なる結束」を「大聖堂の礎石の前で神に誓った」と報じた⁷⁾。すなわち、この祭典を起点に大聖堂の建設とドイツの統一事業は並行的に進展してい

くはずであった。ところが、史実が示すように、その後の統一事業は難航する。そのため、今日に至る歴史研究において、この祭典はドイツ統一を標榜する「国民的祭典」としてよりも、プロイセン国家とカトリック教会の「和解」に重点を置いて評価されてきたといえる⁸⁾。

1815年4月にプロイセン王国に編入されてから、ケルンではプロテスタント官吏とカトリック住民の娘との異宗派婚が増加していった。1825年8月にプロイセン政府は、異宗派婚による子どもはすべて父親の宗派を継ぐことを勅令をもって通達したが、1836年5月にケルン大司教に就任したドロステ・フィッシュェリンク (Clemens August Droste zu Vischering) は、このような政策を教会の教義に反するものと断固拒否する態度を示した。これが「ケルン教会紛争」の始まりであり、この紛争は1837年11月にドロステのプロイセン政府による逮捕・拘禁といった事態にまで発展する。この紛争の收拾に着手したのが、1840年6月に新国王に即位したフリードリヒ・ヴィルヘルム4世であり、国王は即位後すぐに、異宗派婚の問題で教会に大きく譲歩する姿勢を示した。そして、1841年9月にはプロイセン政府と教皇庁との間で紛争終結のための協約が締結され、この協約に基づき大司教代理としてヨハネス・フォン・ガイセル (Johannes von Geissel) が1842年3月にケルンに着任する⁹⁾。こうして、カトリック教会の伝統的権利が再び保証される一方で、国家により「解任」された大司教ドロステの帰還が断念される、といった「妥協」がここに成立したのである。国王自身が主賓として参列する1842年9月のケルン大聖堂建設祭は、こうした国家と教会の「和解」の最終宣言としての意味をもったとされるのである。

また、この大聖堂建設祭には、これまでの研究でもう一つ別の意味も付与されてきた。ヴァルトブルク祭 (1817年) とハンバッハ祭 (1832年) に対抗する「保守的祭典」としての意味づけである。先行する2つの祭典は、「統一と自由」を求める反体制的な自由主義運動と結びついて開催されたもので、ウィーン体制に大きな衝撃を与えたことで知られる。とくにハンバッハ祭には急進的自由主義者の指導により、西南ドイツの各地から25,000人もの人びとが参集し、参加者には教養市民層から小市民層、そして農民層に至る幅広い社会階層が含まれた。このハンバッハ祭に結集した自由主義運動は、オーストリアの宰相メッテルニヒにより徹底的な弾圧を受けるが、このような弾圧も「下から」沸き上がる統一運動を圧殺することはできなかった。他方で、1842年の大聖堂建設祭もハンバッハ祭を上回る数の人びとを集めたが、この祭典ではキリスト教を媒体とする「保守的勢力の結集」が示されたのであり、「国民記念碑」を前にドイツの統一問題における君主の主導権が主張されたと見られるのである¹⁰⁾。

いずれにせよ1840年代初めのケルン大聖堂建設運動も、きわめて広範な社会層から参加者を得ていた。確かに大聖堂建設中央協会の理事会は、上層市民に属する上級官吏や商人の代表者によって占められたが、一般会員においては手工業者などの小市民層の割合が4分の1に達した¹¹⁾。また、ケルンではこの協会とは別に、会費をかなり低く設定したいわゆる「社交協会 (geselliger Verein)」が地区ごとに設立されたが、その会員の大半は手工業者であり、職人や労働者、奉公人といった社会的下層も数多く含まれた¹²⁾。1842年の大聖堂建設祭にもこのような幅広い階層の人びとが集まったと考えられ、さらにプロイセン国王を始めとする君主権力やカトリック教会の代表者が、それぞれ重要な役割を担って祭典に登場したのである。すなわち、共通する政治的理念に導かれて集まったハンバッハ祭の参加者に比べて、大聖堂建設祭に集まった人びとには社会的により多様で、異なる政治的立場の人びとが含まれたといえる。

このように1842年の大聖堂建設祭は、多様な人びとが「国民記念碑」であるケルン大聖堂に引き寄せられ、一堂に会する「国民的祭典」の場となった。本稿の課題は、このような祭典の場に降り立ち、上記のような大聖堂建設祭における国家と教会の「和解」や「保守的勢力の結集」の意味を問い直すことにある。そのために、対立・確執のあったカトリック勢力とプロイセン国王の立場に焦点をあて、それぞれの言動について各章で考察を進めることにする。

1. カトリック勢力

(1) カトリック教徒の「宗派合同教会」化に対する懸念

ケルン大聖堂は、ケルン大司教区に住む約 11 万人のカトリック教徒にとって最大の信仰のよりどころであった。その大聖堂の建設が、完成をめざして再開されるということは、カトリック教徒にとってきわめて喜ばしいことであった。ところが、大きな問題は、この大聖堂の建設がプロテスタントの領邦教会の首長でもあるプロイセン国王の庇護下で、国庫からの強力な資金援助をもって進められようとしていることにあった。このようなことから、カトリックの大聖堂がプロテスタントも使用する「宗派合同教会」になってしまうのではないかと、といった懸念がケルンのカトリック教徒の間に広まるのも無理からぬことであった。

前述のように、そもそも 19 世紀の大聖堂建設運動の原動力は、ナポレオンからのドイツ解放を記念する「国民記念碑教会」の設立をめざす動機から生じていた。1814 年以降に公表された幾つかの構想では、ドイツの偉人たちの彫像や銘板を並べた名誉記念ホールを教会内に設置することが提案されていた。ケルンの大聖堂についても、内部にそのような空間を設けることが、建築家のレオ・クレンツェ (Leo Klenze) やケルンで大聖堂建設運動の先頭にあった芸術愛好家の商人ジュールピツ・ボワスレー (Sulpiz Boisserée) によって語られていた¹³⁾。こうした意味での名誉記念堂としては、バイエルン国王ルートヴィヒ 1 世により 1830 年に建設が開始され、大聖堂建設祭直後の 1842 年 10 月に完成されたギリシャ神殿風のヴァルハラがあった¹⁴⁾。大聖堂がヴァルハラのような無宗派的な施設になってしまうことに対して、カトリック保守派の人びとは警戒感を募らせていた。

こうしたカトリック保守派にとって、大聖堂は「国民記念碑」であると同時に、偉大なるカトリックの中世の記憶を呼び覚ます建造物であり、また、その完成された姿はカトリック信仰復興の象徴となるべきものであった。たとえば、のちに中央党の創設者の一人となる司法官のアウグスト・ライヒェンスペルガー (August Reichensperger) は大聖堂建設協会の創設にも積極的に参加したが、彼は 1840 年に匿名のパンフレットで、大聖堂を「カトリシズムの記念碑」と表現している。そして、「大聖堂は、一貫してカトリシズムの精神で呼吸しており」、それゆえ「プロテスタンティズムに対する最も生命力のある対抗手段を形成する」と述べている¹⁵⁾。ライヒェンスペルガーらにとってケルン大聖堂は、それが「国民記念碑」に祭り上げられようとも、飽くまでもカトリックにのみ帰属するものでなければならず、その一部たりとも異宗派に引き渡されるようなことがあってはならなかったのである。

このような思想的背景に基づく「宗派合同教会」化に対する懸念は、ケルンの大聖堂建設協会の設立時に、カトリック保守派の代表者により表沙汰にされる。1841 年 4 月 13 日、協会の規約草案に関する審議がカトリック・ギムナジウムの講堂に 93 名の市民有志を集めて行われた。そこでは、薬剤師のフランク (Paul Franck) が、設立準備の手続きにおいて信仰への配慮が十分でないことについて最初に不満を述べた。そして、協会設立の準備委員会にプロテスタントが数多く選ばれていることから、彼らが協会への参加と建設資金の提供によって大聖堂について何らかの権利が得られるものと考えているのではないかと、といった疑念がカトリック住民の間に広がっていることを指摘した。それゆえ彼は、大聖堂がはるかな将来においても、もっぱらカトリック教徒によってのみ保持され、他宗派による寄付が大聖堂に関する権利の付与につながらないことを、協会の規約に明記することを要求したのである。これに続いて、医師パルメンティエール (Heinrich H. J. Parmentier) と商人ビンツァー (August von Binzer) がフランクを支持する発言をし、後者は規約の第 1 条に大聖堂がカトリック教会にとどまる規定を盛り込むことを提案した¹⁶⁾。

そして、こうした彼らの要求に配慮するかたちで、規約案の一部が修正されることになった。最終的に採択された規約案の第 1 条は、協会設立の目的について「寄付とその他の適切な手段の献金によって、ケルンにあるカトリック大聖堂の品位ある状態での維持と建設推進に積極的に協力する〔傍点筆者〕」と規

定した。「カトリック」の文言は、委員会の作成した草案にはもともとなかったものである¹⁷⁾。この規約案は、1841年5月28日に国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世のもとに提出され、国王は同年12月8日の閣令をもってこれに認可を与えた。このとき国王はこの協会の「庇護者 (Protektor)」を引き受けることも承諾した¹⁸⁾。こうして国王は、間接的ながらケルン大聖堂が「カトリック大聖堂」にとどまることを公式に約束したのである。

この規約の認可を受けて、翌1842年の2月14日には約3,000人の会員を集めて協会の設立総会が開催された¹⁹⁾。しかし、協会設立後も「宗派合同教会」化に対する懸念が解消されることはなかった。それどころか、9月の大聖堂建設祭が近づくにつれて懸念はむしろ増大していった。その要因の一つとなったのが、その年7月にベルリンで設立された「ケルン大聖堂建設協会」であった。このベルリンの協会を指導したのは政府のプロテスタントの上級官吏であり、その活動はケルンの協会とはっきりと競合するものであった。ベルリンの協会もケルンの協会と同様に国王に規約の認可を受け、国王を「庇護者」として仰ぎ、さらに周辺地域に支部協会の設立を呼びかけたからである。そして、同時期にプロイセン州の州長官テオドル・フォン・シェーン (Theodor von Schön) が、建設資金の調達を促進するために大聖堂を「宗派合同教会」へ転換することを国王に進言しているが、それはベルリンの建設協会を支援することを目的としていた。シェーンのこの発言は新聞などに取り上げられ、ケルンのカトリック保守派を強く刺激することになったのである²⁰⁾。

(2) 大司教代理ガイセルと大聖堂建設祭

(A) 祭典準備におけるガイセルと協会理事会

1842年9月の大聖堂建設祭において、カトリック教会の立場を代表したのは、その年の3月4日にケルンに着任した大司教代理ガイセルであった。2月の設立総会で選出されたばかりの大聖堂建設協会の理事会は、規約第21条に従ってガイセルの着任後すぐに彼に協会の名誉会長に就任することを要請した。3月15日に正式な要請を受けた彼は、「私の力の許す限り、そして私の職務が建設の促進に貢献する機会を与える限り、喜んで力を貸すつもりである」と述べ、就任を快諾した。そして、翌日の理事会の会議にさっそく姿を見せたのである²¹⁾。この協会の理事会40名の中にはルドルフ・キャンプハウゼン (Ludolf Camphausen) を始め8名のプロテスタントが含まれていた。当時、ケルンの人口におけるプロテスタントの割合はわずか9.3% (1840年) であり、理事会にはプロテスタントがかなり過剰に代表されていたことになる²²⁾。ガイセルが名誉会長の地位を積極的に引き受けたのは、このような理事会の宗派構成も考慮して、建設協会の活動にカトリック教会の影響力を確保しようと考えたからであった。そして実際に、祭典の準備過程において、ガイセルと協会理事会は幾つかの問題で意見の対立を見せることになる。

大聖堂建設祭のプログラムについては、国王の意向により、建設協会の理事会と大司教代理により協議され、合意されることになっていた。その協議に際して、ガイセルは自身の邸宅に理事たちを集め、いきなり「我々はすでに一つのプログラムをもっている」と切り出した。そして、250年前に印刷された「典礼書 (Pontificale)」を理事たちの前に示したのである。この時、さまざまな腹案をもってやって来た理事たちの表情には、驚きと当惑の色が広がった。とくに不満の表情を露わにしたのは、プロテスタントの理事たちであったといわれる。そこでガイセルは、教会の儀礼と直接的に関係しない部分、すなわち演説、音楽の演奏、合唱などについては、理事会の自由裁量に委ねることを提案した。これによりその場の雰囲気はかなりなごみ、ガイセルの提案した「ローマ式典礼」が理事会に受け入れられることになった²³⁾。このようにガイセルは式典のプログラムの決定に際して、積極的にイニシアティブを取ろうとしたのであったが、それはある意味で、カトリック教会の軽視と大聖堂の「宗派合同教会」化に対する彼の大きな懸念の表れでもあった。

そのことを示すもう一つの事例が、礎石の溝に埋め込まれる錫板のテキストをめぐるガイセルと協会理

事会との対立である。理事会によって提示されたラテン語によるテキストには「国王が定礎した」とあった。これに対してガイセルは、「国王は大聖堂の所有者でないし、そのよう役割を担う宗教的権能を備えていない」として強硬に反対の態度をとった。彼によれば、大聖堂はカトリック教会が所有するものであり、したがって教会のみが、すなわち大司教代理である彼のみが礎石を据える権利を有するのである。確かに、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の決断、とりわけ年5万ターラーの資金援助の約束がなければ、大聖堂の建設再開は不可能であった。それゆえ、協会理事たちは、定礎式において国王を「定礎者」に位置づけようとしたのである。しかしながら、理事会の提示した礎石のテキストは、ガイセルによれば、国王を大聖堂の単なる「建設者」ではなく、「設立者」にすることを意味した。彼が何よりも恐れたのは、それによって大聖堂が「国王の所有物」と解釈され、「国王が王室の儀式についても使用権を要求し、そしてプロテスタントの臣民にも共同使用権が認められ」てしまうことであった。結局、問題となった文言は削除され、ガイセルの提案に従って錫板には「至聖なる三位一体の名において、そして、この事業の永遠なる記憶のために」と刻まれることになった²⁴⁾。

(B) 国王のミサ出席をめぐる問題

建設協会の理事会によって最終的に国王に提示された祭典プログラムには、国王の大聖堂内での盛式ミサ出席が盛り込まれていた。ところが、その後、国王がミサへの出席を辞退することが理事会とガイセルに伝えられた。この辞退はガイセルの内心の期待とも一致しており、それゆえ彼はこれにすぐに異議を唱えようとしなかった。そもそも彼はプロテスタントの国王をミサに迎え入れることに困惑を感じていたのであり、それは、国王を賓客としてミサに迎えた場合、カトリック教会の儀礼に不案内な国王の「不作法」により教会の権威が傷つけられることを心配せねばならなかったからである。

ところが、国王のミサ出席が祭典プログラムから削除されたことが住民の間に漏れ広がると、これに対する激しい抗議がガイセルに寄せられることになった。住民の意見を代表する多くの市民がガイセルのもとを訪れ、「民衆の憤激」について語った。そして、もし国王が実際にミサを欠席した場合、国王に対して不穏な行動に出る住民が現れ、それによって祭典の進行に支障を来す恐れもあることが指摘された。このような一般の住民からの圧力を受けて、ガイセルも腰を上げざるを得なくなった。彼は8月末になってデュッセルドルフ郊外のベンラート宮殿に滞在の国王に面会を求め、ミサへの出席を要請したのであった。そして、国王はこれをすぐに承諾することになる。ガイセルがこの知らせをケルンに持ち帰ったとき、住民たちの間には大きな喜びが広がり、国王の翻意に成功したガイセルの評判も大いに高まった²⁵⁾。

「宗派合同教会」化に対して強い懸念を示していたカトリック保守派の人びとも、その多くは国王のミサ出席の辞退を安堵をもって歓迎したものと考えられる。すなわち、ここで浮き彫りになるのは、こうしたカトリック保守派及びガイセルと、一般のカトリック住民との間にあった意識の大きな相違である。

「ケルン教会紛争」によるカトリック教会とプロイセン政府との激しい対立からわずか5年しか経っていなかったにもかかわらず、このときケルンの大多数の住民は国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世に対して敵意はもっておらず、むしろ国王を大聖堂に迎え入れることを強く望んだのである。すなわち、多くの住民は国王を両宗派に共通の「我らの国王」と認めており、そのため、国王のミサ欠席をカトリック教徒に対する「軽視」や「侮辱」とも受け取ったのである。上記の「憤激」の背後には、このような住民の意識があったと考えられる²⁶⁾。

(C) 式典におけるガイセルの「満足」

ともかくも大司教代理ガイセルは、祭典準備の過程において建設協会の理事会に対してカトリック教会の立場を貫徹することに努力し、相応の成果をあげたといえる。それでは、実際にプロイセン国王を始めとする多くのドイツ諸侯の参列した式典で、彼は本意を遂げることができたのであろうか。参列したドイツ諸侯とその他の賓客のうちカトリックであったのは、オーストリアのヨハン大公と宰相メッテルニヒ、そしてバイエルンの王子などわずか6名であった²⁷⁾。ガイセルは、バイエルン国王ルートヴィヒ1世の

表 1842 年の大聖堂建設祭の行事日程

● 9月3日(土曜日) 〈祭典前日〉	
19:00～20:00	教会の鐘と祝砲による祭典開催の合図。
*19:30	国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世と王妃の到着と歓迎。
*21:00	ランタン行列。聖ゲレオン教会前の広場 (Gereondriesch) → 県庁 (国王滞在)。
● 9月4日(日曜日) 〈祭典当日〉	
5:00～6:00	教会の鐘と祝砲による祭典開催の合図。
7:30	協会旗の行進。市庁舎前広場 (Rathausplatz) → ノイマルクト (Neumarkt)。
8:00	祭典行列の集合・出発。ノイマルクト → 大聖堂西玄関。
9:00	大聖堂での盛式ミサ。 祭典行列。大聖堂西玄関 → 大聖堂南の広場 (Domhof)。 大聖堂南の広場 (Domhof) での定礎式典。
*14:30	大聖堂南西の広場 (Domkloster) に設置された天幕での祝宴。
*19:30	蒸気船によるライン河遊覧。ライン河岸のイルミネーション。
*23:30	国王のブリュール到着 (宿泊)。

註：*印の行事については、出典に示す新聞に発表されたプログラムに含まれなかったが、実際に開催された大聖堂建設祭に関する以下の新聞記事で知ることができ、事前に準備されていたものとしてここに含めた。*Kölnische Zeitung*, Nr. 248/249, 6. September 1842; *Reinische Zeitung*, Nr. 248-49, 6. September 1842.

出典：Kölner Domblatt, Nr. 9, 28. August 1842.

出席を熱望し、個人的にも書簡を送ってこれを強く要請したが、その望みは叶えられなかった²⁸⁾。そこでガイセルがとくに心配したのは、プロイセン国王を始めとするプロテスタント諸侯が、大聖堂でのミサと定礎式においてカトリック教会の権威を傷つけるような態度をとることであった。

上掲の「日程表」にあるように、大聖堂のミサに向かう祭典行列は、午前8時にノイマルクトに集合し、市街の約1.4 kmの行程を練り歩き大聖堂に到着、入場し、9時半ごろには大聖堂内の内陣、身廊、側廊などの所定の位置に整列した。そして10時ごろ、プロイセン国王を先頭にして賓客たちが大聖堂の西の玄関から入場した。ガイセルが玄関で国王と王妃を出迎えたが、簡単な挨拶のことばをかけたただけですぐに奥の内陣へと案内した。そして、ガイセルの司るミサは、その後、1時間45分にも及んだ²⁹⁾。

こうしたなかで、人びとの注目を集めたのが、王妃エリザベートの一挙一動であった。彼女はバイエルン国王マキシミリアン1世の娘として生まれ、1823年に22歳でプロイセンの現国王のもとに嫁いできた。しかし、その後も彼女はカトリック信仰を維持し、ホーエンツォレルン家の圧力によりプロテスタントに改宗するのは、結婚して6年後のことであった³⁰⁾。このような背景から、王妃は体調がすぐれないという理由でミサを欠席すると噂されていた。その王妃がミサに出席し、「聖変化」の場面では国王の傍らでひざまずき、カトリックのスタイルで胸の前で十字を切ったのである。このとき国王も祭壇に向かって恭しくお辞儀をした。こうしてプロイセン国王と王妃はミサにおいて一貫して敬虔な態度を示し、カトリックのミサを初めて体験する他のプロテスタント諸侯たちもそれを見習うことになった。ガイセルは、のちにこのときの様子をウィーンの教皇特使へ報告し、諸侯たちにより示された「こうした〔カトリック教会に対する〕敬意は4年前には死に絶え、葬られていたもので、二度と復活することはないと思われていた」と述べている³¹⁾。大聖堂でのミサをガイセルは大いなる喜びを感じて終えたのである。

盛式ミサが終わると、祭典行列は再び西の玄関から街に出て、大聖堂の鐘の鳴り響くなか絨毯や葉飾りで飾られた市街地を一回りして、大聖堂の南の広場(ドームホフ)に入り再び整列した。そのとき広場は数千人の見物人によって埋めつくされていた。次頁の図に見られるように、大聖堂の内陣と南塔の間の側壁に沿って貴賓席が設けられており、その中央に国王と王妃が席を占める八角形のパビリオンが建てられ

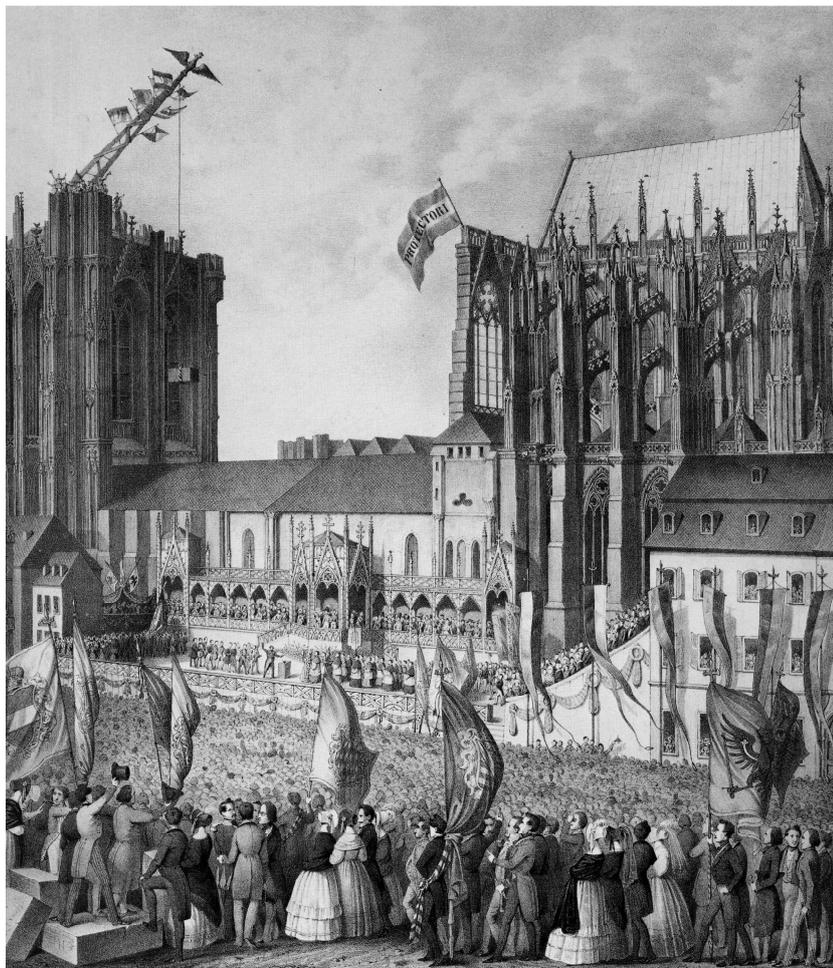


図1 大聖堂建設祭における定礎式の様子（1842年9月4日）

中央でハンマーを振り上げているのが、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世。南塔のクレーンの先端には、プロイセン王国の紋章に採用される鷲が取り付けられ、クレーンは建設開始を象徴する最初の石材を吊り上げようとしている。

出典：Arnold Wolff, *Dombau in Köln: Photographen dokumentieren die Vollendung einer Kathedrale*, Stuttgart 1980, S. 35.

ていた。貴賓席の前は広いステージになっており、定礎式はそこで行われた。

この定礎式では、まず大司教代理ガイセルがステージ中央に置かれた縦横 98 cm、高さ 78 cmの礎石に「ローマ式典礼」に従って厳かに聖別を施した。この聖別式が終わると、礎石に穿たれた溝に例のラテン語のテキストが刻まれた錫板が入れられた。礎石の溝には、そのほかに羊皮紙に書かれた大聖堂建設中央協会の規約やそれを承認した閣令の文書、協会理事会の名簿といった記念の品々が円筒形のカプセルに入れられ、納められた。それから礎石の溝に石の蓋がされると、さらにその上に礎石と同じサイズの石材が置かれ、柄で固定された。こうした一連の儀式が終わってよいよ国王がステージ上に招かれて、礎石にハンマーを3回打ち下ろす儀礼に臨んだのである。

図はこの定礎式の様子を描いた石版画であり、礎石を前に国王がまさに最初の一撃を与えようとしている場面である³²⁾。

ここで問題となるのは、このときに国王が行った演説である。次章で述べるように、この演説により観衆は感動の渦に巻き込まれ、国王は一

挙に大聖堂建設祭の圧倒的な主役の座に躍り出ることになる。そのため、国王のすぐ後に演説を行うガイセルは、著しく不利な立場に置かれることになった。貴賓席で式典を観覧していたボクスレーも、国王の演説にひどく心を揺さぶられた一人となる。彼によると、国王の後に続いたガイセルや大聖堂建設中央協会の会長ハインリヒ・v・ヴィトゲンシュタイン（Heinrich von Wittgenstein）の演説は、「国王の演説の強力な印象のあとで、ほんのわずかな反響しか得られなかった³³⁾」。さらにガイセルの演説はにわか雨にも崇られ、これにより観衆の注意力が大きく削がれることになった。ガイセル自身、バイエルン国王ルートヴィヒへの書簡（1842年10月26日付）で、このときの「自分の仕事に満足できなかった」ことを告白し、その主な原因について「国王の後に演説することが困難であった」と述べている³⁴⁾。

ガイセルがこのとき観衆の前で強調しようとしたのは、第一に大聖堂の建設のカトリック的意義であった。彼は演説において、大聖堂建設祭を「宗教の祭典」、「芸術の祭典」、「祖国の祭典」として、それぞれの意義について順に述べたが、「祖国の祭典」で語られた「国民的意義」は、最初に掲げられた「宗教的意義」に従属させられるべきものであった。以下のような、彼の演説の最後の言葉がそのことをはっきり

り示している。

「神のために我々は館を造る。神の目は、昼も夜もこの地に見開かれており、神の御心はこの地に永遠に宿り続ける。そして、たとえ目に見えなくとも、神が聖櫃のなかにどっしり腰を下ろされているのが、心の目にはっきりと映るのであり、神は我々が捧げる祈りを聞いているのである。〔中略〕神はこの大聖堂に、この都市、この国、この帝国、そして全祖国ドイツの上に降り立つ。それによってこれらは発展し、権力と勢力、調和と愛をもって繁栄するのである。」³⁵⁾

ここで「聖櫃」の強調は、カトリックの聖体拝領の教義と結びつくもので、これによりプロテスタントとの根本的な相違が提示されている。その上で、祖国の将来の発展が、神の恩寵をもって語られているのである。このような言葉からは、カトリック教会による大聖堂の独占的所有権を明確にしようとする意図を読み取ることもできる³⁶⁾。しかし、こうしたガイセルの言葉は、前述のように、式典会場に詰めかけた多くの観衆の耳には届かなかったようである。

それにもかかわらず、ガイセルはこの式典全般について、前述のルートヴィヒへの書簡で「素晴らしい、興味深い式典」であったと語っている。そのような印象には、プロイセン国王を始めとする諸侯たちがカトリック教会に対して示した敬意のみでなく、何よりもガイセル個人に対して払われた敬意が作用していたようである。例えば、ヴィトゲンシュタインに続いて大聖堂建設監督ツヴィルナー (Ernst Friedrich Zwirner) の最後の演説が終わると、式典会場では諸侯たちによるハンマーの打ち下ろしがしばらく続くことになったが、その間にプロイセン国王はパビリオンの貴賓席をステージ上に立っていたガイセルに勧めた。そのとき国王は、ガイセルを出迎えるためにわざわざ階段の登り口まで降り、親しげに手を差しのべたのである。『ケルン大聖堂新聞』の記事によると、観衆の多くがこのような国王の行動に気づき、「大きな喜びをもって」それを見守ったという³⁷⁾。ガイセルは、前述のルートヴィヒへの書簡で、こうした国王の好意に満ちた態度について繰り返し言及し、さらに、祭典の後でブリュールの宮殿で国王に面会が許され、諸侯たちとともにアーヘンまで同行する「名誉に与った」こと、さらに国王から二等赤鷲勲章を授けられ「感謝の喜びに満たされた」ことについて語っている³⁸⁾。

1842年9月の大聖堂建設祭は、ケルンのカトリック保守派の市民とカトリック教会を代表するガイセルにとって、プロイセン国王に、そしてプロイセンにおいて圧倒的な多数派であるプロテスタントに大聖堂を奪われまいとする「闘争の場」になったと見るができる。大聖堂建設協会の規約案の第1条の修正、「ローマ式典礼」を基本とする式典プログラムの採用、礎石に納めるラテン語のテキストの変更などにおいて、カトリック側の要求は確かに貫徹されていった。そして、大聖堂建設祭において大司教代理ガイセルは、カトリック教会及び彼個人に対して示されたプロイセン国王の敬意に大いなる喜びを感じたようである。しかし、このような彼の祭典における「満足」は、カトリック教会と国王との「和解」において何を意味したのであろうか。その問いに答えを出すためには、次にプロイセン国王の立場からこの「国民的祭典」の場の検討を行う必要がある。

2. プロイセン国王

(1) フリードリヒ・ヴィルヘルム4世とケルン大聖堂

すでに指摘しているように、そもそも1842年のケルン大聖堂の建設再開は、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の強力な支援の約束がなければ実現し得ないものであった。彼が大聖堂建設祭に主賓として招かれ、定礎式で最初に礎石にハンマーを打ち下ろしたのはそれゆえであった。それでは、どのような動機をもって彼は、プロテスタントの国王でありながらカトリック大聖堂の建設を推進しようとしたのであろうか。

対ナポレオン戦争を契機として、ゴシック様式のケルン大聖堂が「国民記念碑教会」の地位を獲得しようとしたころ、まだ若き王太子であったフリードリヒ・ヴィルヘルム4世もケルン大聖堂の魅力に取りつかれた一人となった。ケルンでは1808年より、S・ボワスレーが私財を投じて、大聖堂の建設再開を準備するための測量調査を独自に進めたり、大聖堂に関する歴史的資料の収集や図版集の出版などにも取り組んでいた。王太子はすでに文学や芸術に造詣の深いことで知られており、ボワスレーはライプツィヒの戦いの直後の1813年12月、フランクフルトに滞在していた18歳の王太子に面会を求め、自身のケルン大聖堂の建設構想を開陳したのである。王太子はこのときボワスレーにより示された大聖堂の図面にひどく感激し、それから三晩も眠れなかったとのちに告白している³⁹⁾。

そして、翌年の7月16日、王太子はケルンを訪れ、ボワスレーの案内で初めて大聖堂を目の当たりにすることになる。ボワスレーは、この時の王太子の様子を弟のメルヒオル(Melchior Boisserée)に宛てた手紙(7月17日付)で以下のように描写している。

「あなたは彼〔王太子〕が、どれほど喜んだのか想像できないでしょう。〔中略〕王太子は今すぐにも大聖堂を完成させたいという思いに駆られたようである。そして、我々が内陣の奥へと進んでいた時、彼はもはや我慢ができなくなり感涙にむせいだ。」⁴⁰⁾

王太子自身も、妹のシャルロッテ(Charlotte)に宛てた手紙で、この時のことを「世界で最も美しい演劇」の体験として語り、そこで自身が「声を出して泣いてしまった」ことを打ち明けている⁴¹⁾。

その後も、王太子はケルンを繰り返し訪問し、大聖堂に対する憧憬をますます深くしていったようである。それを示すものとして、王太子によるケルン大聖堂のスケッチが数多く残されている。彼の描いたスケッチは全部で4,500枚にも及ぶが、ゴシック様式の教会建築に関するものがそのうち約550枚あり、そのなかの約150枚がケルン大聖堂に関係するものであった。これらは、彼がケルン大聖堂に出会った直後の1813～1818年の間に集中的に描かれている⁴²⁾。このような事実から、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世が即位してすぐにケルン大聖堂の建設支援に乗り出したのは、カトリック教会との「和解」を目的とする政治的動機のほかに、青年期より培われた大聖堂に対する強い憧憬を大きな動因としていたといえる。

もちろん、彼はケルン大聖堂をめぐる複雑な政治的問題もよく理解していた。彼がスケッチに描く完成した「ケルン大聖堂」の多くは、ベルリンのシュプレー河畔に建っている⁴³⁾。これには当時のプロイセン国家とライン地域の微妙な政治的關係が作用していたと見ることができる。1815年に併合されたライン地域のプロイセン国家への法制的統合には多くの軋轢がともなった⁴⁴⁾。「ケルン教会紛争」というかたちで噴出した宗教的対立もその一つである。前述のように、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は父王の政策を撤回するといった譲歩により政治的な「和解」をめざしたのであり、ケルン大聖堂の建設支援もこの「和解」に貢献するはずであった。要するに、以下で見ていく大聖堂建設祭における国王の行動も、彼のロマン主義的傾倒と政治的問題に関する配慮といった2つの観点から見ていく必要があるのである。

(2) プロイセン国王のカトリック教会に対する態度

国王のカトリック教会との「和解」をめざす姿勢は、大聖堂建設祭においても明確であった。祭典準備の段階から、国王は教会の立場を尊重する態度を繰り返し示している。まず、定礎式で国王が礎石にハンマーを打ち下ろす行為については、大司教代理のガイセルに事前に同意が求められている。これを行うことは国王自身の発案であったが、このような行為がカトリック教会の教義に抵触することがないかを、彼はあらかじめ確認したのである⁴⁵⁾。さらに、祭典プログラムの策定がガイセルと大聖堂建設協会の理事会との協議に委ねられたのも、国王による政治的配慮が働いたものと理解できる。

そして、国王の大聖堂でのミサ出席をめぐる問題においても、国王による慎重な配慮を確認することができる。彼がミサ出席を辞退したのは、まずプロテスタントの国王として大きな抵抗を感じたからであり、王国内で多数派を占めるプロテスタントに配慮したためと考えられる。ところが、ガイセルの要請に応じ

て国王がミサ出席をすぐに快諾したのは、前述の通りである。ただし、国王はプロテスタント教会での日曜礼拝を済ませたのちに大聖堂のミサに出席することにしたのであり、その際、プロテスタント教会での礼拝についてガイセルにあらかじめ了解を求め、そのうえでミサ出席について最終的な回答を与えるといった手順を踏んでいる⁴⁶⁾。

また、前章で見たように、カトリック保守派とガイセルは、国王が大聖堂の使用権をプロテスタントに認めるのではないかと、いった懸念を抱いていたが、カトリック教会との政治的な「和解」をめざす国王にそのつもりは全くなかった。ケルン大聖堂を「宗派合同教会」にした場合のカトリック側の激しい反発は、国王に十分に予測できたからである。カトリック側の懸念は、結果から見ても「杞憂」に過ぎなかったとあってよい。1842年7月にプロイセン州長官のシェーンが国王に大聖堂の「宗派合同教会」への転換を進言した際、国王がこれにはっきりと反対を表明したことも、その左証として指摘できる。また、このとき国王は、ビザンチン様式の「国民大聖堂」をプロテスタントのためにベルリンに建設することを構想していたといわれる⁴⁷⁾。

他方で、大聖堂建設祭における国王の態度には、彼のロマン主義的傾倒の大きな作用も認められる。ガイセルが国王に大聖堂のミサ出席を求めて面会した時、国王はまず、「私が盛式ミサに出席しない、とされたことには純粋な誤解がある」と述べた。そして、そもそも「あなた方の儀礼行為がいかにか素晴らしいか、そしてそれに出席しない場合、私自身がきわめて大きなものを失うことを、私はよく知っている」と続けたのである⁴⁸⁾。これは彼が中世的世界を体現するゴシック様式の教会建築のみでなく、カトリックの伝統的儀礼にも強い興味をもっていたことを窺わせる発言である。したがって、国王の盛式ミサにおける恭しい態度は、「和解」のための政治的配慮と同時に、彼のロマン主義的傾倒にも帰すことができるのである。そのことは、盛式ミサの終わった後で国王がガイセルに漏らした感想からも推し量ることができる。国王は「ミサの間の一瞬一瞬が、実に感動的であった」と述べ、「奉献唱 (Offertorium) の素晴らしい歌声、その間、祭壇から丸天井へ昇っていく香の煙、一般の参列者たちが一斉にひざまづくさま、聖変化のときの厳粛なる沈黙」が彼をいかに魅了したかについて語った。彼は盛式ミサが進行するなかで醸成される神秘的雰囲気酔いしれたのである⁴⁹⁾。

したがって、前章で見たような、定礎式の会場でガイセルにパビリオンの貴賓席を勧めるといった国王の予定外の行動も、大聖堂での神秘的なミサを一身に取り仕切り、そして直前には礎石の聖別式を厳かに執り行った高位聖職者に対する畏敬の念から、ごく自然に出たものと見ることもできる。いずれにせよ、こうしたロマン主義に起因する国王の行動はガイセルに大きな喜びをもたらしたのであり、カトリック教会との「和解」に大いに寄与したことは確かといえよう。ところが、前述のように、定礎式の演説で国王はガイセルの存在を完全に脇に押しやり、大観衆の圧倒的な注目を集めることになる。その演説の主題とは、ケルン大聖堂の建設が体現するドイツの「国民問題」であった。

(3) 国王の演説

前述のように、ガイセルの執り行う礎石の聖別式が終わると、ハンマーの撃ち下ろしの儀式のために国王がステージ上に招かれた。『ケルン大聖堂新聞』によると、「国王が礎石の前に立った時、嵐のような歓声が沸き起こり、国王が手で合図して繰り返し静粛を求め」ねばならなかった。そして、「静寂が戻ったところで、国王は力強く、よく通る声で」以下のような演説を行ったのである。

「余はこの機会をとらえ、プロイセン及びドイツ全土のさまざまな大聖堂建設協会の会員として、この日を賛美するためにここに参集した敬愛すべき多くの来客に、心から歓迎の意を表したい。

ケルンの紳士の皆さん！ 皆さんのなかで、偉大なことが生じようとしている。皆さんがすでに感じられているように、これはありきたりの豪華建造物ではない。これは全ドイツ人、全宗派の者の同胞意識による事業である。余がこのことを考える時、目には喜びの涙があふれ、余はこの日を体験で

きることを神に感謝する。

礎石の置かれるここに、かの塔とともに、全世界で最も美しい門が聳え立つことになる。ドイツがそれを建てるのだ。それゆえ、それはドイツにとって、神の恩寵によって、新しい、偉大な、よき時代の門となることであろう！ あらゆる邪心、不純、偽り、すなわち非ドイツ的なるものをこの門から遠ざけよ。ドイツ諸侯と人民の団結を掘り崩す恥ずべき試み、諸宗派と諸身分の平和を揺り動かす試みは、この名誉の道を通すまい。かつてこの神の家の建設を、そして祖国の建設を妨げた精神は、二度とこの地に入れてはならぬ。

この門を打ち建てる精神は、29年前に我々を縛る鎖を打ち砕き、祖国の恥辱を払いのけ、このライン左岸を異国化から守った精神である。それは、〔解放戦争とともに戦った〕3人の君主のうち最後にこの世を去りゆく父王の祝福によって鼓舞され、2年前に衰えることのない若々しい活力を維持していることを示した、あの精神でもある。それはドイツの団結と力の精神である。ケルン大聖堂の門が、この精神を迎える輝かしい門とならんことを！ この精神が、打ち建て、完成させるのである！ そして、この偉大なる建造物は、諸侯と人民の団結のもと無血で世界の平和を獲得する偉大で強力なドイツのことを、偉大なる祖国の栄光と自らの繁栄によって幸福にあふれるプロイセンのことを、そして、唯一の崇高なる神のもとで一体であることを悟った異なる宗派の同胞意識のことを、のちの世代に告げ知らせるようになるろう！

余は神に願う、ケルン大聖堂よ、この都市の上に、ドイツの上に高く聳え立て。時代を超えて、人類の平和に、神の平和に、そしてこの世の終わりにまで到達せよ。

(大きな歓声により中断)

ケルンの紳士の皆さん！ あなた方の都市はこの建造物によって、ドイツのどの都市よりも優遇されている。そして、都市自身、それがきわめて応分であることを認めたのである。本日は、このような自賛に相応しい日である。私に唱和されたい。この唱和のもとで、私は礎石にハンマーを打ち下ろすことにしよう。この都市の数千年にもわたる称賛を私に唱和されたい。ケルン万歳 (Alaaf Köln) ！」⁵⁰⁾

以上が、国王の演説の全文である。この演説においてまず強調されているのは、ケルン大聖堂の建設が、異なる宗派の枠を超えたすべてのドイツ人の「同胞意識」による事業であることである。そして、大聖堂を「全世界で最も美しい門」と比喻し、ドイツの分裂につながるような試みや精神を決して通してはならない、と国王は訴えるのである。また、この門を建設する精神を「ドイツの団結と力の精神」と表現し、この国民的精神の起源を「29年前」の出来事、すなわち1813年のナポレオンに対するドイツ解放戦争に求めている。そして、この精神は「2年前」、フランス政府によるライン左岸の領土要求に端を発する「ライン危機」の際になお健在であることが示されたとされる。

この演説の後に、前述のようなガイセルの演説が続いたのであるが、国王の演説の長さはガイセルの4分の1ほどであり、途中の中断を含めても3～4分程度であったと考えられる。また、ガイセルの演説に比べて国王の演説の文章は簡潔であり、感情的な語り口の多用も効力を発揮し、聴衆の心に強く響いたのである。『ケルン大聖堂新聞』は、国王の演説は「稲妻のように数千人もの聴衆の心に火をつけ、筆舌に尽くしがたい歓喜と称賛の嵐を呼び起こした⁵¹⁾」と述べている。

このとき感動の渦に巻き込まれたのは、一般の聴衆のみではなかった。国王の言葉は、賓客席に立ち並んだ人びとにも大きな感動をもたらしたのである。このとき貴賓席で陸軍大臣ヘルマン・v・ボイエン (Hermann von Boyen) の隣にあったS・ボワスレーは、礎石の聖別式を支配した「厳かな雰囲気」が国王の演説により一転したときの様子を、以下のように日記に書き残している。

「私はヨハン大公が前を通り過ぎるのを見た。すべての者の目に涙が浮かんでいた。メッテルニヒ侯も衝撃を受けた様子で、私の手を強く握ってきた。心を揺さぶられ、深く感動したと私に見えた政治

家や軍人、友人や旧知の名前をすべてここに挙げることはできない。」⁵²⁾

オーストリア皇帝の代理として祭典に出席したヨハン大公は、大聖堂建設祭から5日後の9月9日、プロイセン国王に招待されたブリュールの宮殿での晩餐会で、「プロイセンも、オーストリアもない！ あるのはただ一つの、岩山のように頑強なドイツのみ！ ドイツ万歳！」と乾杯の祝辞を述べている⁵³⁾。これは定礎式における国王の演説に強く感化され、それに呼応したものといえる。この祝辞はその後『ケルン新聞』で報じられ、市民の間に大きな反響を呼び起こしている。

ここで注目すべきは、オーストリアの宰相メッテルニヒの態度である。彼は「国民問題」におけるプロイセンとの対抗を強く意識して、大聖堂建設祭に乗り込んできていた。彼は1842年4月に、ケルン大聖堂の建設を強力に支援すべきことを皇帝のフェルディナント1世に進言している。その際に彼は、ケルン大聖堂に対する無関心によって「オーストリアが精神的にも、現実においてもドイツから距離を置いており、ドイツとはプロイセンの指導下にある関税同盟に限られる」といった印象が生じてしまう危険を指摘している⁵⁴⁾。そのメッテルニヒは、国王の演説のあいだ上着のポケットから長い櫛を取り出し、それで髪を頭頂部から前へと入念に梳かし続けた⁵⁵⁾。国王の演説の間も、なるだけ平静を保とうと努めていた様子が窺われる。その彼でさえ、ボワスレーの証言にあるように、会場全体を包み込んだ熱狂に抗することができなかつたのである。しかし、彼はすぐに冷静さを取り戻したようである。翌日には、国王に同行していた博物学者アレクサンダー・v・フンボルト (Alexander von Humboldt) に、前日の定礎式における熱狂について、「それは相互の陶醉であり、恐らくはそれを生み出す者〔国王〕にとってこそ危険になる」と語っている⁵⁶⁾。

そのような「危険」を鋭敏に察知したのはメッテルニヒのみでなかつた。のちにプロイセン王位を継承することになる国王の弟ヴィルヘルムも貴賓席でこの演説を聞いており、その内容に大きな不安を掻き立てられていた。10月初めに妹のシャルロッテに宛てた書簡で彼は、兄の演説の才能を率直に認めながらも、「このような演説はよくないと私は考える。なぜなら、望ましくない答えを導き出す可能性があるからである」と述べている⁵⁷⁾。メッテルニヒも王太子ヴィルヘルムも、この演説が「国民問題」について過剰な期待を人びとに煽り立て、「下から」のドイツ統一運動を制御できない状態に導くことを強く危惧したのである。

実際、大聖堂建設祭の目撃者になったケルンの若き企業家メヴィッセンも、国王やヨハン大公の言葉から大きな期待を抱くことになった。彼は国王の演説をプロイセンが旧来の領邦国家的政策を放棄し、統一ドイツの推進者になる合図と受け取った。そして、それに呼応したヨハン大公の言葉も、祖国ドイツの幸福な未来を予言するものとして彼の心に強く響いたのである⁵⁸⁾。そして、市民層の一般的心情を代弁していたと考えられる『ケルン大聖堂新聞』も、祭典の様子を詳細に報じた記事の最後を、以下のような言葉で締めくくっている。

「ここでは全能なる神の目の前で、教会と国家の同盟、諸侯間の同盟、ドイツ諸部族間の同盟が締結された。そして、内においても、外からも、いかなる敵もこの幸福なる結束を曇らせたり、また侵すことはできない。なぜなら、ケルン大聖堂の礎石の前で行われた神への誓いは、永遠に再生されることになるからである。」⁵⁹⁾

ここに市民層の共通理解を読み取ることができる。この大聖堂建設祭では、集まった諸勢力によりドイツ統一のために同盟が締結され、それが神の前で誓われたものと見なされたのである。

いずれにせよ、プロイセン国王の演説では、きわめて曖昧なドイツ統一構想しか示されていない。歴史家 H・v・トライチュケは、この演説を「真の芸術作品」と形容し、これは「国王の揺り動かされた内面から、直接的にあふれ出たもの」であり、それゆえに「明確な政治的内容もなく、いかなる解釈も、誤解も可能であった」としている⁶⁰⁾。ロマン主義者である国王は、伝統的な分邦主義的体制を基本とする中世的な国家理念の持ち主であり、このとき具体的で、現実的な統一構想を持ち合わせていたわけではない。

こうした曖昧さゆえに国王の演説は多くの人びとを惹きつけ、多くの「誤解」を生み出しながら一人歩きを始めるのである。そして、メッテルニヒが懸念した「危険」は、1848年について現実のものとして噴出するのである。

おわりに

1842年9月のケルン大聖堂建設祭では、プロイセン国王がカトリック大衆の前に姿を見せること自体が、カトリック教会とプロイセン国家の「和解」を象徴する最高のパフォーマンスであったといえる。このとき国王は、カトリックの一般信徒の熱烈なる要望に応えるかたちで大聖堂での盛式ミサにも出席し、プロテスタントの領邦教会の首長でありながら、カトリック臣民の君主でもあることをはっきりと示したのである。

そもそも国王が大聖堂建設の支援に乗り出す動機が、彼のゴシック大聖堂へのロマン主義的憧憬にあったにせよ、カトリック教会との「和解」をめざす政治的意図は建設祭の準備段階より明確であった。そして、大聖堂建設祭では大司教代理ガイセルを大いに「満足」させ、プロイセン国家とカトリック教会との「和解」はここで大きく進展したと見るができる。しかしながら、ここで注意すべきは、「和解」のために積極的に手を差しのべたのは国王であり、国王とカトリック教会とではこの「和解」に臨む姿勢が相違していた点である。ケルンのカトリック保守派とガイセルには、むしろ国王に対する根強い不信感が大聖堂建設祭に至るまでであった。それを顕著に示すのが、大聖堂がプロテスタントも使用できる「宗派合同教会」に変えられることに対して表明された懸念であった。そして、このような懸念は大聖堂建設祭においても完全に払拭されることはなかった。国王は定礎式の演説で、「国民記念碑」である大聖堂の建設の意義を高らかに謳いあげ、大聖堂の建設をドイツの「全宗派の同胞意識による事業」と表現したからである⁶¹⁾。

他方で、国王はケルン大聖堂は「カトリック大聖堂」であることを公式に認めており、大聖堂の「宗派合同教会」化の意図を全くもっていなかったことに鑑みると、両者の「和解」には深刻な擦れ違いが内包されていたといえる。大聖堂建設祭におけるガイセルの「満足」も、結局は国王との直接的な接触によって得られた個人的なものであり、彼が国王の権威に一時的に取り込まれた結果と見るができる。したがって、ガイセルの満足は「和解」における擦れ違いを埋め合わせるものでは決してなかった。

それでは、ドイツ諸侯の「保守的勢力の結集」として大聖堂建設祭はどのような意味をもったのであろうか。この問題に関連して改めて指摘すべきことは、大聖堂建設祭がプロイセン国王を中心とする「君主の祭典」としての性格を強く帯びていたことである。祭典行事の多くが国王の予定を軸に組まれていたことは、「日程表」においても確認できよう。そして、祭典行事において圧倒的な関心を集めたのも国王の行動であり、『ケルン新聞』も国王に関係する行事について事細かに報じている。

本論中で言及できなかった行事について述べると、まず、祭典の前日の9月3日、ケルンに到着した国王には盛大な歓迎行事が待っていた。国王の宿舎となる県庁舎には、国王に歓迎の挨拶をするために県庁の上級官吏や駐屯軍の将校のほか、市長、助役、市議会議員、そして大聖堂建設中央協会の全理事が集まった。そして、その夜には、国王と王妃に歓迎の意を表すためのランタン行列が、おもに大聖堂建設協会の会員により編成された。この行列は、大勢の見物人が押し寄せるなか楽団を先頭に市街を行進し、最後に県庁の前に整列した。そして、バルコニーに姿を見せた国王に合唱を献上するとともに、市民の代表3名が前に進み出て歓迎の辞を述べた。また、祭典当日の定礎式のあとの行事日程はすべて国王を中心とする行事で占められた。午後2時半からの大聖堂南西側の広場（ドームクロスター）に設置された巨大天幕での祝宴は国王の主催であり、これには他のドイツ諸侯のほか前日に県庁に集まった官吏や市民の代表者たち総勢500人が招待された。そして、午後7時半からのライン河遊覧では、国王や他のドイツ諸侯が3

隻の蒸気船に分乗し、兩岸を飾るイルミネーションを観覧した。このとき大聖堂は、ベンガル花火の青白い光によって美しい姿を闇夜に浮かび上がらせた⁶²⁾。

このような「君主の祭典」は同時にドイツ諸侯による「保守的勢力の結集」を意味したであろうか。大聖堂建設祭にはドイツ連邦の指導国であるオーストリアからも皇帝の代理としてヨハン大公が参列していた。また、定礎式では国王に続いて参列した諸侯たちも順々に貴賓席からステージ上に進み出て、大観衆の前で次々とハンマーで定礎石を撃っていった。このような光景は、「保守的勢力の結集」を象徴的に示すものであったといえる。しかし、メッテルニヒの言動は、「国民問題」をめぐるプロイセンとオーストリアとの指導権争いを示唆しており、その後の歴史的展開も示すように、「保守的勢力の結集」はこの二大国により容易に引き裂かれうるものであった。さらに、この「保守的勢力の結集」は、その中核となるべきプロイセン国王の演説によって、これに対抗する勢力に力を与えるものとなった。明確な統一構想をもたないまま直情的に発せられた国王による「統一の約束」は、この「結集」の乱れを暗示するものであると同時に、「下から」の統一運動に危険な火種を与えるものとなる。

ケルン大聖堂の建設運動は、1842年9月の大聖堂建設祭以降も拡大を続ける。大聖堂建設中央協会の会員数は1842年の終わりまでに15,300人に達するが、これにはおよそ8,000人のケルン外の在住者が含まれた⁶³⁾。地方の支援協会の数も、建設祭の開催時のおよそ60から、ピークとなる1845年には144を数えることになる⁶⁴⁾。ドイツの「国民記念碑」に関する政治社会史的考察を最初に試みたT・ニッパードは、このような大聖堂建設運動の拡大について、この運動が「曖昧な合意」に基づいて進められ、それゆえ「きわめて多様な政治的潮流と動機が、一緒になって作用した」ことをその要因として指摘している⁶⁵⁾。ケルン大聖堂は1813年の解放戦争の勝利を想起させる「国民記念碑」とされ、これが建設運動の最大の原動力となったことは確かである。しかし、本稿において明らかになったのは、ケルン大聖堂が多義的な象徴機能を負わされていたこと、換言すれば、同時代の異なる立場の人びとによってきわめて多様な象徴的意味が託されていたことである。大聖堂建設祭をプロイセン国家と教会の「和解」、あるいは「保守的勢力の結集」を示す「保守的祭典」とする解釈も、多様な広がりや錯綜を見せる象徴的意味のそれぞれ一つをとらえたにすぎなかったといえる。

〔付記〕

本稿は、平成19～20年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（研究代表者 若尾祐司）『ヨーロッパ「歴史の場」に関する研究』の研究成果報告書に掲載された拙稿「1842年のケルン大聖堂建設祭」に加筆・修正を施したものである。

〔註〕

- 1) 1248年の最初の定礎から1560年に停止するまでの建設工事の概要については、Arnold Wolff, *Die Baugeschichte der Domvollendung*, in: Otto Dann (Hg.), *Religion-Kunst-Vaterland: Der Kölner Dom im 19. Jahrhundert*, Köln 1983, S. 48-50; Eduard Trier, *Der vollendete Dom*, in: Hugo Borger (Hg.), *Der Kölner Dom im Jahrhundert seiner Vollendung*, Bd. 2: *Essays*, Köln 1980, S. 36などを参照。
- 2) 大聖堂建設祭はその後、1848年、1852年、1855年、1863年、1867年と繰り返し開催された。拙稿「19世紀中葉のケルン大聖堂建設祭——『新聞資料』から見える祭典の構造的特徴——」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ（社会科学）』第13集（2011年）63-89頁を参照。なお、大聖堂建設中央協会は当初「中央」を冠していなかったが、地方における支援協会（Hilfs-Verein）の設立に対応して「中央」を名乗るようになる。祭典に参列した支援協会の代表者名簿（*Kölner Domblatt: Amtliche Mittheilungen des Central-Dombau-Vereins*（以下 *KDbl* と略記），Nr. 12, 11. September 1842に掲載）によると、この時まで地方の支援協会の数は少なくとも60に達した。
- 3) Otto Pfülf, *Cardinal von Geissel: Aus seinem handschriftlichen Nachlaß geschildert*, Bd. 1, Freiburg im Breisgau 1895, S. 166; Hubert Bastgen, *Vatikanische Aktenstücke zu Metternichs Anwesenheit beim ersten Kölner Dombaufest* (4. September

- 1842), in: *Römische Quartalschrift*, 36, 1928, S. 302 を参照。
- 4) ゲーテ「ドイツの建築—エルヴィン・フォン・シュタインバッハの霊に (1772年)」『ゲーテ全集』13 (新潮出版社, 1980年) 105-112頁。
 - 5) Thomas Nipperdey, Nationalidee und Nationaldenkmal in Deutschland im 19. Jahrhundert, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 206, 1968, S. 546-551; Herbert Rode, Sulpiz Boisserée und der König von Preußen auf dem Kölner Dombauefest 1842, in: *Kölner Domblatt: Jahrbuch des Zentral-Dombauvereins*, 8/9, 1954, S. 120-121.
 - 6) Joseph Görres, Der Dom in Köln, in: ders., *Ausgewählte Werke*, hrsg. von Wolfgang Frühwald, Bd. 1, Freiburg im Breisgau 1978, S. 258. ゲレスがこの論説を発表した当時, 実際にケルン大聖堂は廃墟のような状態にあった。1794年10月に始まるケルンのフランス統治時代に, 大聖堂の一部は捕虜の収容施設や軍隊の糧秣庫として使われ荒廃がかなり進んだからである。ケルン大司教区が廃止された1801年には, 大聖堂の取り壊しまでが検討されたが, 廃材の適当な捨て場所が見つからなかったことが幸いして, それは何とか免れた。Wolff, *Die Baugeschichte der Domvollendung*, S. 50; Trier, a. a. O., S. 37; Carl Dietmar/Wener Jung, *Kleine illustrierte Geschichte der Stadt Köln*, 9. überarbeitete und erweiterte Auflage, Köln 2002, S. 125-126. その後, 1821年7月にプロイセン統治下でケルン大司教区が再興されると, 1823年には政府の支援により倒壊を防ぐための修復工事が開始され, これが1840年まで続けられた。Arnold Wolff, *Der Kölner Dombau und das Wiedererwachen des deutschen Katholizismus im 19. Jahrhundert*, in: Norbert Trippen/Wilhelm Mogge (Hg.), *Ortskirche im Dienst der Weltkirche: Das Erzbistum Köln seit seiner Wiedererrichtung im Jahre 1825*, Köln 1976, S. 47; Arnold Wolff, *Die Baugeschichte des Kölner Domes im 19. Jahrhundert*, in: Borger (Hg.), a. a. O., Bd. 2, S. 26.
 - 7) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
 - 8) Ernst Rudolf Huber, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789*, Bd. II: *Der Kampf um Einheit und Freiheit 1830 bis 1850*, Stuttgart 1957, S. 263; Rudolf Lill, *Die Beilegung der Kölner Wirren 1840-1842*, Düsseldorf 1962, S. 228; Norbert Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842 und die Absichten Friedrich Wilhelms IV. von Preußen bei der Wiederaufnahme der Arbeiten am Kölner Dom: Eine historische Reflexion zum Dombauefest 1980, in: *Annalen des Historischen Vereins für den Niederrhein*, H. 182, 1979, S. 103.
 - 9) Huber, a. a. O., Bd. II, S. 185-260.
 - 10) Franz Schnabel, *Deutsche Geschichte im Neunzehnten Jahrhundert*, Bd. 4: *Die Religiösen Kräfte*, Freiburg im Breisgau 1937, S. 156; David E. Barclay, Ritual, Ceremonial, and the "Invention" of a Monarchical Tradition in Nineteenth-Century Prussia, in: Heinz Duchhardt/Richard A. Jackson/David Sturdy (eds.), *European Monarchy: Its Evolution and Practice from Roman Antiquity to Modern Times*, Stuttgart 1992, S. 215; Kathrin Pilger, *Der Kölner Zentral-Dombauverein im 19. Jahrhundert: Konstituierung des Bürgertums durch formale Organisation*, Köln 2004, S. 164. なお, ハンバッハ祭と結びついた自由主義運動の社会的基盤に関して, 我が国では南直人「ドイツ『初期』自由主義とその社会的基盤——ハンバッハ祭を中心に——」『西洋史学』96号(1986年)が先駆的研究としてある。
 - 11) 大聖堂建設祭中央協会及び地方の支援協会の会員名簿 *Dombauarchiv*, II^c, 152: Verzeichniß der bis zum 9. Februar 1842 einschliesslich in die Unterzeichnunglisten eingetragenen Mitglieder des Dombau-Vereins zu Köln; *Verzeichniß der Mitglieder des Central-Dombau-Vereins zu Köln und der demselben angeschlossenen Hilfs-Vereine so wie jenigen Personen, welche durch geeignetes Gaben zur Förderung des Vereins-Zweckes beitragen haben*, Köln o. J. により明らかになる。
 - 12) Jürgen Herres, *Städtische Gesellschaft und katholische Vereine im Rheinland 1840-1870*, Essen 1996, S. 141.
 - 13) Rode, a. a. O., S. 121; Nipperdey, Nationalidee und Nationaldenkmal, S. 548-549; ders., Kirche und Nationaldenkmal: Der Kölner Dom in den 40er Jahre, in: Werner Pöls (Hg.), *Staat und Gesellschaft im politischen Wandel: Beiträge zur Geschichte der modernen Welt*, Stuttgart 1979, S. 178.
 - 14) Nipperdey, Nationalidee und Nationaldenkmal, S. 551-552; 大原まゆみ『ドイツの国民記念碑 1813-1913 ——解放戦争からドイツ帝国の終焉まで』(東信堂, 2003年), 33-41頁。
 - 15) Nipperdey, Kirche und Nationaldenkmal, S. 185; Pilger, a. a. O., S. 42.

- 16) *KDbl*, Vorbericht, Beilage B, Nr. 13, 1842. このとき審議された規約案は *KDbl*, Vorbericht, Beilage B, Nr. 12, 1842 に収録。
- 17) 国王に認可された協会規約は、協会の機関紙の第 1 号 (*KDbl*, Nr. 1, 3. Juli 1842) に掲載された。
- 18) *KDbl*, Vorbericht, Beilage C, Nr. 25-26, 1842.
- 19) *KDbl*, Vorbericht, Beilage C, Nr. 31-32, 1842.
- 20) Kirsten John, Das Kölner Dombauefest von 1842 — eine politische Demonstration König Friedrich Wilhelms IV. von Preußen, in: Nikolaus Gussone (Hg.), *Das Kölner Dombauefest von 1842: Ernst Friedrich Zwirner und die Vollendung des Kölner Doms*, Dülmen 1992, S. 78; Ursula Rathke, Die Rolle Friedrich Wilhelms IV. von Preußen bei der Vollendung des Kölner Doms, Teil II, in: *Kölner Domblatt: Jahrbuch des Zentral-Dombauvereins*, 48, 1983, S. 44. ベルリンの協会は、1842 年 7 月 27 日に第 1 回の総会を開催している。*KDbl*, Nr. 6, 7. August 1842 の記事を参照。
- 21) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., 1895, S. 159. この註 3) に前掲の O・プフェルフによる『ガイセル伝』(全 2 巻) は、カトリック教会の立場より書かれ、ガイセルの聡明な指導者としての人物像を前面に出そうとする傾向がはっきり見られる。なお、ガイセルが名誉会長に就任してのち、彼は大聖堂建設祭までに 6 回を数えた理事会の会議のうち 4 回に出席している。*KDbl*, Vorbericht, Beilage D, Nr. 36-37, 1842; *KDbl*, Nr. 2, 10. Juli 1842-Nr. 7, 14. August 1842 に掲載の議事録を参照。
- 22) 1842 年 2 月 14 日の設立総会で選出された協会理事については、*KDbl*, Vorbericht, Beilage C, Nr. 33 を参照。また、ケルンの人口における宗派別割合に関しては、*Kölner Statistisches Handbuch, Sonderausgabe Statistischen Mitteilungen der Stadt Köln*, Köln 1958, S. 64 を参照。
- 23) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 160-161; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 104.
- 24) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 162-163; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 105; Rode, a. a. O., S. 119. 改訂後のテキストは、*KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842 に掲載。
- 25) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 161-162; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 106-107.
- 26) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 162; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 107.
- 27) Bastgen, a. a. O., S. 302; Christian Brylak/Gerlinde Lütke Notarp, Das Kölner Dombauefest von 1842 — Ausgleich zwischen Kirche und Staat?, in: Gussone (Hrsg.), a. a. O., S. 100.
- 28) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 163-164; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 106.
- 29) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 165; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 108. 祭典の進行経過に関しては、*KDbl*, Nr. 9, 28. August 1842; *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842; *Kölnische Zeitung*, 6. September 1842 に掲載の記事等を参照。また、Karl Schorn, *Lebenserinnerungen: Ein Beitrag zur Geschichte des Rheinlands im neunzehnten Jahrhundert*, Bonn 1898, S. 157 も参照。
- 30) David Barclay, *Anarchie und guter Wille: Friedrich Wilhelm IV. und die preußische Monarchie*, Berlin 1995, S. 69-71; Pilger, a. a. O., S. 166.
- 31) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 166; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 109.
- 32) *KDbl*, Nr. 9, 28. August 1842; *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
- 33) Rode, a. a. O., S. 119; John, a. a. O., S. 79.
- 34) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 166.
- 35) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
- 36) Brylak/Notarp, a. a. O., S. 101; Pilger, a. a. O., S. 166.
- 37) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
- 38) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 167; Trippen, Das Kölner Dombauefest 1842, S. 107.
- 39) Rode, a. a. O., S. 113.
- 40) John, a. a. O., S. 63. Vgl. Renate Eichholz, Sulpiz Boisserée und der Dom zu Köln, in: Borger (Hg.), a. a. O., Bd. 2, S. 20.

- 41) Thomas Parent, Die Hohenzollern als Protektoren der Kölner Domvollendung, in: Borger (Hg.), a. a. O., Bd. 2, S. 117-118. 王太子の妹のシャルロッテは、1817年7月にロシア皇帝アレクサンドル1世の弟ニコラウス・ニコライ・パヴロヴィチ大公と結婚し、アレクサンドラ・フョードロヴナに名を改めた。大公が1825年にニコライ1世として皇帝に即位し、彼女は皇后となる。
- 42) John, a. a. O., S. 65; Rathke, a. a. O., Teil I, in: *Kölner Domblatt: Jahrbuch des Zentral-Dombauvereins*, 47, 1982, S. 130. このころ建築家フリードリヒ・シンケル (Friedrich Schinkel) が父王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世に提示した「国民記念碑教会」の構想図も、彼に大きな刺激を与えていた。
- 43) John, a. a. O., S. 66-67.
- 44) 行政的な統合政策とそれに対するライン地域の抵抗に関しては, Rüdiger Schütz, *Preußen und die Rheinlande: Studien zur preußischen Integrationspolitik im Vormärz*, Wiesbaden 1979 を参照。
- 45) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 160.
- 46) Ebenda., S. 162.
- 47) John, a. a. O., S. 77-78; Rathke, a. a. O., Teil II, S. 45.
- 48) Pfülf, a. a. O., Bd. 1., S. 162.
- 49) Ebenda, S. 165.
- 50) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842. 最後の"Alaaf Köln"はケルンの方言。また、演説文中、筆者が「解放戦争とともに戦った」と補足した3人の君主とは、ロシア皇帝アレクサンドル1世 (生没年: 1777 ~ 1825年), オーストリア皇帝フランツ1世 (同: 1768 ~ 1835年), プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世 (同: 1770 ~ 1840年) のことであり、この中でプロイセン国王の没年が最後となる。なお、この国王の演説については、木庭宏『民族主義との闘い—ハインリヒ・ハイネ「ドイツ・冬物語」研究』(松籟社, 1987年) 76-77頁にもほぼ全訳があるが、これは『アウクスブルク一般新聞 (*Augsburger Allgemeine Zeitung*)』(1842年9月9日)に掲載されたものをもとにしている。
- 51) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
- 52) John, a. a. O., S. 79; Rode, a. a. O., S. 115.
- 53) *Kölnische Zeitung*, 18. September 1842.
- 54) Thomas Parent, *Hohenzollern in Köln*, Köln 1981, S. 57. しかし、皇帝はこの問題をそれほど重視しておらず、メッテルニヒの強い要請にもかかわらず、8,000グルデンを一回、寄付するにとどまった。Ebenda.
- 55) August Reichensperger, *Zur neuern Geschichte des Dombaues in Köln*, Köln 1881, S. 11; Heinrich von Treitschke, *Deutsche Geschichte im Neunzehnten Jahrhundert*, Bd. 5: *Bis zur März-Revolution*, Leipzig 1894², S. 175.
- 56) Rode, a. a. O., S. 116.
- 57) Parent, *Hohenzollern als Protektoren*, S. 118; Pilger, a. a. O., S. 165.
- 58) Joseph Hansen, *Gustav von Mevissen: Ein rheinisches Lebensbild 1815-1899*, Bd.1, Berlin, 1906, S. 263; Pilger, a. a. O., S. 164.
- 59) *KDbl*, Nr. 11, 6. September 1842.
- 60) Treitschke, a. a. O., Bd. 5, S. 175.
- 61) Rode, a. a. O., S. 120; John, a. a. O., S. 80.
- 62) *Kölnische Zeitung*, 6. September 1842.
- 63) 1842年終わりの会員数は *Verzeichniss der Mitglieder des Central-Dombau-Vereins zu Köln* …より明らかになる。
- 64) Wolff, *Die Baugeschichte der Domvollendung*, S. 55.
- 65) Nipperdey, *Kirche und Nationaldenkmal*, S. 184; ders., *Der Kölner Dom als Nationaldenkmal*, in: *Historische Zeitschrift*, 1981, S. 595-613, besonders S. 599.